



2023年5月29日放送

## 「ワクチン忌避に対する医療従事者への教育活動

—動機付けインタビューによるアプローチ—

新潟大学小児科教授 齋藤 昭彦

### はじめに

皆さんは、「ワクチン忌避」という言葉をお聞きになられたことはありますか？  
ワクチン忌避とは、接種可能なワクチンがあるにも関わらず、ワクチン接種を躊躇したり、拒否することを指します。ワクチン忌避はこれまでに世界のほとんどの国で報告されていますが、特に近年のインターネット、Social Network System (SNS) の普及によって、ワクチンの情報が様々な形で提供、普及、拡散されています。ワクチン忌避は、以前より大きな問題として取り上げられていましたが、特にコロナウイルス感染症2019 (COVID-19) に対するワクチン接種をきっかけに顕在化しました。新型コロナワクチンは、特に高齢者や基礎疾患のある人の重症化予防に大きな成果を上げましたが、一方で、健康な小児や成人の COVID-19 は、多くは軽症であることから、彼らへのワクチン接種においては、接種を拒否したり、躊躇する人が存在し、いわゆる「ワクチン忌避」の問題が国内でも根強いことを明らかにしました。

#### 「ワクチン忌避」とは？

- 定義: 接種可能なワクチンがあるにも関わらず、ワクチン接種を躊躇したり、拒否すること
- 世界のほとんどの国で報告
- 近年のインターネット、SNSの普及で、ワクチンの情報が様々な形で提供、普及、拡散
- 新型コロナワクチン接種をきっかけに顕在化

### ワクチン忌避に対する米国小児科学会との合同プロジェクト

日本小児科学会は、この様なワクチン忌避を重要な問題として取り上げ、それに対して先進的な取り組みをしている米国小児科学会 (AAP) との合同プロジェクトを立ち上げました。その取り組みについて簡単にお話します。

まず最初に、2021年に国内のワクチン忌避の現状を把握することを目的に、小児科医に対する KAP (Knowledge, Attitude, Practices) Survey (知識、態度、実践を問

うアンケート)を行いました。その結果、ワクチン忌避をもつ保護者は多く、その対応が国内で重要で、かつ必要であることが分かりました。これに対してどの様に対応するのか？そこで、Motivational Interview (動機付け面接) という手法を用いて、これを解決するプロジェクトを立ち上げました。

#### ワクチン忌避に対するプロジェクト

- 日本小児科学会と米国小児科学会との合同プロジェクト
  - 2021年: 小児科医に対するKAP Survey (知識、態度、実践を問うアンケート) を実施
  - その結果、ワクチン忌避をもつ保護者は多く、その対応が国内で重要で、かつ必要であることが明確に
- ↓
- Motivational Interview (動機付け面接) を用いて、これを解決するプロジェクトを設立

### 実際の面接について

皆さんが接する患者さんとの話の中で、ワクチン忌避があると判断された保護者の方がいた場合、どの様に会話を始め、どう進めていけばよいのでしょうか？

最初のアプローチが、Presumptive Approach (当たり前のこととして話す) です。すなわち、今日接種予定のワクチンを子どものケアに必要なもの、必須のものとして話す方法です。「今日お子さんには、MR ワクチンとムンプスワクチンを接種します。」など、予定されているもの、当たり前のものとして保護者の方にアプローチします。保護者は、これは通常のケアとして行われているもの、皆が接種しているものと認識し、接種に同意します。このアプローチによって、子どものワクチン接種率が上昇することが確認されており、有効なアプローチとして知られています。おそらく、定期接種のワクチンで、特に問題がなく接種されているワクチンは、皆さん、このアプローチをされていることと思います。

#### 実際の面接

- Presumptive Approach (当たり前のこととして話す)
    - 接種予定のワクチンを子どものケアに必要なものとして話す方法
  - Motivational Interview (動機付け面接)
    - 常に相手に寄り添いながら会話を進める
    - 「OARS」の順番で話を聞く
      - Open-ended question (自由回答式の質問)
      - Affirmation (賛同)
      - Reflection (反映)
      - Summarize (まとめる)
- ↓
- これらの流れを模擬患者 (事前に録画したビデオ) を通して練習し、ワクチン忌避をもつ保護者にこの手法を用いてアプローチすることを学ぶ

### Motivational Interview (動機付け面接) とは？

次に Motivational Interview (動機付け面接) について、少し説明します。先程紹介した Presumptive アプローチが難しく、「ワクチン接種による副反応が心配です」「このワクチンに効果があるのかわかりません」などの心配がある場合に Motivational Interview (動機付けインタビュー) を用います。このインタビューを行う上で、最も大事なポイントは、常に相手に寄り添いながら会話

を進めることです。相手の持つワクチンへの不安や疑問に対し、同感し、理解する姿勢を示すことです。また、インタビューのアプローチは、「OARS」を基本とします。OARSとは、Open-ended question（自由回答式の質問）、Affirmation（賛同）、Reflection（反映）、Summarize（まとめる）の4つの英語の頭文字をとったもので、その順番でインタビューを進めます。

例をあげてみます。最初のOは、「このワクチンについて、何がご心配ですか？」など、「はい」、「いいえ」で答えることのできない自由回答式の質問で始めます。それによって、自由に被接種者、保護者の意見を聞くことが可能になります。そこで保護者からの不安、疑問などが出た時には、「そうですね、それはご心配ですね」「お子さんのことを第1に考えておられるのですよね」など、必ず賛同（A）を示します。決してそこでは、その不安、疑問などを打ち消す否定的なことを言うてはいけません。その訴えを受け入れた後で、「このワクチンについて調べてみたのですが、もしよろしければ少しお話しさせて頂いてもよいですか？」などと問い、相手に許可を得た場合のみ説明をし、自分の意見を反映させます。これが（R）です。ここでは、可能な限り、専門用語ではなく、優しい言葉で説明を心がけます。そして、情報を提供し、相手と会話をしながら、相手の考えが変わっているかどうかを見極めます。変化が見られたと想定されても、そこで、すぐに接種するかどうかを問うのではなく、迷いがある場合などは、例えば、次の外来の予約をした上で、そこで、もう一度、一緒に考えましょうなど、次のアプローチを前もって計画しておくことも重要です。そして、最後にこれまでの会話のまとめを行います（S）。最後のまとめは、自分の訴えを別の人から聞くことによって客観性をもってその事実を判断することが可能となります。

この様な流れを模擬患者を通して練習し、ワクチン忌避をもつ保護者の方々へのMotivational Interviewを用いてアプローチすることを学ぶのがこのプロジェクトの最大の目的です。

### 実際のセミナーについて

ワクチン忌避を持つ保護者の方々へのインタビューのトレーニングを行う第1回のセミナーが2023年1月に東京で行われました。コロナウイルスの感染症の影響で、なかなか人が集まらない状況で、模擬患者ではなく、それぞれのワクチンについて、俳優による想定回答をビデオクリップとして録画し、それを用いてインタビューの練習をすることとしました。既に米国で行われたセミナーのシナリオを参考にし、それを日本語のシナリオに直し、計120以上の想定回答を俳優さんに演じて頂き、ビデオ撮影、編集しました。その後、国内の10名の有志にファシリテーターをお願いし、AAPのメンバーとの複数回のWeb会議、実際のインタビュー方法の実践練習などを重ねました。初めてのことであったので、多くの準備が必要でしたが、無事、日本小児科学会の予防接種・感染対策委員会のメンバー、ファシリテーターが所属する施設で興味をもつ小児科医を

中心に若手からベテランまで、約 30 名を超える方々が集まり、会を開催しました。

最初に総論の講義を4つ行った後、ムンプスワクチン、ヒトパピローマウイルス (HPV) ワクチン、新型コロナワクチンの3つのシナリオで、Motivational Interview (動機付け面接) の練習を6つのグループに分けて行いました。計6時間のセミナーで、1グループ

#### 実際のセミナー

- 第1回のセミナー: 2023年1月に東京で開催、計6時間
- 10名の国内のファシリテーター、6名の米国小児科学会からの協力者
- 30名以上の小児科医中心の参加者
- 実際のセミナー内容
  - 総論の講義 (4講義)
  - 3つのシナリオ (ムンプスワクチン、ヒトパピローマウイルスワクチン、新型コロナワクチン)
- 6つのグループ
  - 1グループ: 2名のファシリテーター+4-5名の参加者

に2名のファシリテーターがつき、4-5名の参加者と一緒にグループセッションを行いました。議論は大変活発に行われ、その会は成功のうちに終わりました。多くの感想が寄せられ、このアプローチの有用性が確認されました。

#### これからの展開について

今後は、このセミナーを小児科医だけではなく、ワクチン接種の機会があり、ワクチン忌避を持つ患者と接触の可能性のある感染症専門医、プライマリ・ケア医、ワクチン外来の看護師、薬剤師の皆さんなどにも広げられたらと考えています。それによって、ワクチン忌避をもつ保護者がワクチンについて尋ねた際に、子どもと保護者の周りの全ての方がMIを心がけていれば、行動変容につながる可能性があります。

また、今回、学んだMIのアプローチは、決してワクチン忌避の保護者への対応だけではなく、他の領域への応用が可能です。例えば、ある疾患に対する治療のオプションを提示する際に、その治療に賛同していない保護者に説明をするときなど、アプローチは有効となるでしょう。また、医療者と患者のコミュニケーションをとる上でも、このアプローチは重要で、当たり前のことですが、医療者が患者、保護者に寄り添う姿勢は常に尊重されなくてははいけません。時に、自らが推奨するワクチン接種を保護者が拒否する場合に、どうしても「なぜ？」という気持ちが先行し、自らの主張を伝えようとしてしまいがちですが、まずは、相手がなぜそのような感じているのか、その理由を聞いて、そして、それに共感する姿勢を示すことが重要です。それができて初めて、お互いの会話が同じレベルにセットされ、そこから会話が始まります。

#### これからの展開

- 小児科医だけではなく、感染症専門医、プライマリ・ケア医、ワクチン外来の看護師、薬剤師などに拡大
- ワクチン接種だけでなく、他の面接への応用の可能性
- 医療者と患者のコミュニケーションを考える上で重要
- 今後の開催については、日本小児科学会のホームページなどを参考に

今後、本セミナーを様々な機会で開催していきたいと考えていますので、参加を希望されたい方は、是非とも、日本小児科学会からのお知らせなどを参考にさせていただきたいと思います。